



## キリストの聖体 (マルコ 14:12-16,22-26)

どこでどんな働きをお望みですか

キリストの聖体の祭日を迎えました。この祭日に選ばれた福音朗読を通して、私たちが神の望みや神の思いに触れるために、どのような心構えが必要なのかを考えてみましょう。そのヒントとなる言葉は、弟子たちがイエスに尋ねた「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」(14・12)だと思います。

最近野球を安心して観ることができません。楽勝で勝ったと思った日の試合が、寝る前にスポーツニュースを確認したら終盤7点入れられて逆転負けを食らっていました。1イニングに10点取られて大敗した日もありました。ここは一つ、応援しているチームに喝を入れに行く必要があると思っています。

ということで、6月17日は応援しているチームに喝を入れに行きます。この日は何も予定を引き受けることはできませんので、当然司祭館のチャイムを鳴らすこともダメですし、ましてや誰かが死んでもお世話できません。よろしくお願いします。

私が応援しているチームが序盤から混戦を抜け出せないことも、見方を変えれば「セ・リーグ全体が面白くなる」と見ることもできます。私の見方だけを正解と思うなら、それは間違いです。答えはしばしば、別の見方に立つときに見出すものです。

さて福音朗読ですが、考えるヒントに選んだ「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」この個所は、だれの立場に立って考えることができるでしょうか。「どこへ行って用意いたしましょうか」という問いかけを見る限り、これは弟子たちの立場でものを言っているのだと考えるかもしれませぬ。

ですが、すぐ後に続くイエスの指示を読めば、考えは変わるでしょう。「その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』」(14・14)

弟子たちへのイエスの指示は、明らかにイエスの立場に立って動くことを求めています。では少し戻って、「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」これもまた、弟子たちの立場に立って読み解くのではなく、イエスの立場に立って読み解く必要があるということなのです。

そこで翻訳の問題を考えてみます。元の言葉では、よりはっきりとイエスの指示に沿って動いていると読み取れる可能性があります。そこで、元のギリシャ語にできるだけ近い日本語にすると、「あなたが過越の食事を食べるために、われわれは行ってどこに準備するようにとあなたは望みますか」となるそうです。これだと、なるほどイエスの指示を仰ぎながら行動していることが読み取れます。

弟子たちがイエスに仰いだ指示。これが今週私たちの学びでもあり

ます。「あなたが過越の食事を食べるために、われわれは行ってどこに準備するようにとあなたは望みますか。」もちろんそのまま当てはまるわけではありません。込められている思いを汲み取るのです。次のようにまとめたいと思います。「あなたの望みに応えるために、私たちにどこでどんな働きをお望みですか。」

ここには「あなたのために私がこうしてあげましょう」といった思いは取り除かれています。お世話好きの人であれば、ついこのように言いたくなる場所です。けれども弟子たちがあえて「私たちがこうしてあげましょうか？」と言うのを控えた、そこを見落としてはいけません。常に、イエスが何を望むのか、どのようにすることを望むのかを考えるべきなのです。

私は過去に、ある人の取った行動をこっぴどく叱ったことがあります。教会の正面に、石を掘って作られた御像が設置されていて、私が巡回教会のミサから帰って見たら、一人の信徒がその御像にペンキ塗りをしていたのです。もちろん主任司祭の了解もなく、独断でした。「どういうつもりだ」と、顔を真っ赤にして叱った記憶があります。

本人は、汚れが目につくのでペンキを塗ろうと思ったそうですが、たとえば言うなら墓石に汚れが付かないようにペンキを塗ったようなものだったのです。今思うと、思い止まらせるためにもっと上品な言葉を使うべきでしたが、その時は頭に血が上ってどうにもなりませんでした。

たまに、田平教会でも同じ気分になることがあります。本人は良かれと思ってしているのかもしれませんが、主任司祭に報告してからなすべきことを、自分の判断だけで実行しているのを見聞きします。がっかりします。そしていまだに、良かれと思っているのか、何の報告もありません。

もっと、一人ひとり考える余地があります。「あなたの望みに応えるために、私たちにどこでどんな働きをお望みですか。」主任司祭から「誰の許可を得てしているのか」と言われるのはある意味大したことではありません。主任司祭はいつか変わるのですから。

しかし、イエスから「誰の許可を得てそんなことをしているのだ」と言われたら、それは致命的です。自分の行動に命をもって責任を取ることになるかもしれません。「これくらいは許される」「これくらいは」自分一人で正しいと思った判断は、しばしば正しくないと思うべきです。

すべての人がイエスに問いかけるべきです。「あなたの望みに応えるために、私たちにどこでどんな準備をお望みですか。」長を任せられている人、活動団体に入って協力している人、病院に入院している人でも、イエスに問いかけるのです。そして一人残らず、イエスの望みに自分を合わせようと、日々自分をおささげしましょう。常にイエスの望みを追い求める人に、神はご自分の望みを打ち明けてくださいます。